

◎ 第91回定例研究会

1月17日(金)

於：静岡県評会議室

## 本の紹介「ハマータウンの野郎ども」

ポール・ウィリス著 ～学校への反抗、労働への順応～

報告者：多田義幸 氏（静岡県労働研究所 事務局長）

### ●なぜこの本を紹介するのか

・静岡労研「春のシンポジウム」（4/26）において、基調講演を伊藤大一氏が「非正規雇用と労働運動」という内容で行います。今回は、その予備学習という位置づけです。

・伊藤氏は2004年に徳島県で結成された請負労働者組合の7年間にわたる調査を行ってきましたが、「非正規労働者の組織化」で成功した例として、多くの教訓を投げかけています。

・請負労働者組合のもつ条件の一つとして、伊藤氏は「反学校文化」を指摘していますが、「反学校文化」を分析した「ハマータウンの野郎ども」という本を、今回、紹介します。

### ●本の紹介「ハマータウンの野郎ども」

・労働階級の子どもたちは、労働階級の職務におもむいてゆく。この場合に不可解なのは、なぜみずから進んでそうするのかということである。

・反学校文化の特徴は「権威＝当局」に対する敵がい心である。

・「野郎ども」の行動の特徴は、服装、喫煙、飲酒、時間、ふざけ、喧嘩である。

・「野郎ども」は、反学校文化のなかで鮮やかに労働階級文化の要点をつかむ。その要点とは、反抗、権威の転覆、フォーマルなものの弱点と錯誤を見抜くインフォーマルな視点、気晴らしや享楽を自分たちで創り出す能力、などであった。

・「野郎ども」は、たいていの労働は「金もうけのための汚れ仕事」なのであって、現金の必要を

充足してくれるかぎり耐えるに値するものと思っている。重要なのは職場の独特の雰囲気である。

・職場が牢獄のように見えてくれば、教育こそがそこからまぬがれうる唯一の脱出口であったという事情が了解される。だが、もはや手おくれなのである。

・全体としてみれば支離滅裂ではあっても、手労働こそが彼らの人生観をかたちづくる。

・上昇の階段をよじ登ろうとする利口さよりも、その階級に生きつづける愚直さが選ばれることになる。反学校文化は少年たちの肩から、順応への圧力と能力主義の重荷を取り除く。

・対抗文化は、なぜ、社会変革のための政治行動へと発展できないでいるのか。それは、根深い、誤解に満ちた、分断の状況である。なかでも、精神労働と肉体労働との、男性と女性との、この二つの分断が重要である。

・なぜこうまでして働かなければならないのかと考えるよりも、厳しさに耐えて働き抜く根性に男らしさが賭けられているのである。

### ●労働総研・静岡労研の懇談会

1月23日(水) 於：静岡県評

労働運動総合研究所（労働総研）からの申し入れにより、静岡労研と懇談会を行いました。労働総研からは、小越、大須、藤田の3氏が、静岡労研からは、萩原、林、種本、中澤、多田の5氏が参加しました。静岡労研の設立経過や、これまでの活動内容について説明し、現在抱えているテーマや今後の課題について意見交換しました。

\*連絡先：〒422-8062 静岡市駿河区稲川 2-2-1 コハラサウスサイドビル 7F  
静岡県労働研究所 TEL 054-287-1293 FAX 054-286-7973

メール [roudouadv@wave.wbs.ne.jp](mailto:roudouadv@wave.wbs.ne.jp) ホームページ <http://www.geocities.jp/shizuokarouken/>